聞思の人 1

曽我量深集 上

そがりょうじん

教学研究所 編

東本願寺

曽我量深集 上　目次

如来――方便法身と法性法身――……009
願力回向……016
浄土と穢土……023
自信教人信……032
真実之教……038
真実の信楽……052
如来と浄土……063
明信仏智……074
仏教の統一／諸仏平等／自我の世界／諸仏と阿弥陀／果遂の誓
浄土の問題……094
親鸞の歴史観／釈尊の悟り／浄土の成立／本願と浄

土／往相と還相

清沢満之先生……105

はじめに／道を求めて／信境のままに／責任あることば／報身仏ということ／現前の境遇／矛盾の人生／自利の信心／利他教化／本願力回向／観仏と念仏／自己を信ずる／機の深信／自覚／深の意味／句面のごとく／真実／恍惚の信／深心／自覚の信／深信／善悪の沙汰／唯除の問題／二十願の成就

鏡の発見……162

人の世を歎く／唯仏一道／火宅の利益／真信の開顕／十七願の発見／人間の信仰／法の鏡／二種深信

人間の自覚——唯除について——……178

抑止と摂取／本願の正機／自信／現生正定聚／誓願不思議

疑惑……194

第二十願の意義／環境と身体／問と答／真実信心と

罪福信心／群生海

公共性……210

衆生共同の本願／個別的信と普遍的行／十七願と二十願／本願の公共性／公明正大の念仏

大信……221

弥陀をたのむ／「たのむ」の意味／果徳満入の至心／行信の成就

世界に通ずる道……231

信心と往生……236

『歎異抄』の編纂／御物語と異義八ヶ条／第一条の内容／「おたすけ」が根本／摂取不捨の利益／信と願

信に死し願に生きよ……254

前念命終・後念即生／心の命終・身の命終／大無量寿経の眼目／菩薩と阿羅漢／四衆／一味平等の悟

り／信に死し
あとがき……275

凡例

一、本書は真宗大谷派宗務所出版部より昭和五十二年に発行された『曽我量深集上』を底本とした、改訂版である。但し、「信に死し願に生きよ」は『親鸞聖人七百回大遠忌法要記録レコード集』（一九六六年真宗大谷派宗務所御遠忌記録編纂室編集）の講演記録を参考に編集を行った。

一、漢字は原則として通行の字体にあらため、読みやすさを考慮して、漢字をひらがなに、またひらがなを漢字にするなどした。

一、引用文は、底本引用文を尊重しつつ、旧漢字・旧仮名遣いは通行の字体・仮名遣いにあらため、適宜書名を付した。

一、底本中、今日の人権意識に照らして問題と考えられる表現については、適宜改めた。

曽我量深集　上

如　来

――方便法身と法性法身――

如来と申しても総即別名でわれらの信ずる西方浄土の阿弥陀如来のことであるが、いちいち阿弥陀如来というとなにか特別の仏と考えるので、むかしの聖教によってただ如来と申しておるのである。如来はくわしくは尽十方無碍光如来と申す。曇鸞の『往生論註』には阿弥陀如来について「如来は是れ実相身なり、是れ為物身なり」とある。

我われの内仏に安置しておる木像や絵像は方便法身となっておる。これはだいたい釈尊の姿であろう。人間の姿であろうが後光がさしている。普通の人間に後光はない。これは方便法身の姿であろう。その方便法身がどうもわからぬと多くの人はいう。「真実の阿弥陀如来はそのように木像や絵像にあらわすことのできぬものであろう。法性法身は形も色もましまさぬ、形ましまし色ましますはたんなる方便であろう」というがそうではない。方便法身と法性法身とは二つあるようで二つあるのでなく、いちおう二つ立てるがこれは一つのもの、不二のものと曇鸞はいう。もちろん曇鸞にはじまるのではない。龍樹がもとである。

曇鸞は阿弥陀について法性法身と方便法身は一つになっておるという。そのもとはどこにあるかと申せば第十一願である。だいたい四十八願は、無三悪趣の願からはじまって六神通の願につづいて、第十一願必至滅度の願がある。「設い我仏を得んに、国の中の人天、定聚にも住し、必ず滅度に至らずば、正覚を取らじ」。これが第十一願であるが、それから光明無量、寿命無量の願がでてくる。この二願は方便法身であろう。四十八願の順序次第は正しく決まっておる。光明無量、寿命無量は方便法身で、それが第十一願の次にでてくるということはとくに大切なことであろう。

いったい阿弥陀という仏はどこからでてきたかと申すと、これは第十一願、真実証がもとである。この第十一願を浄土にいたって仏になるというが、未来に浄土に往生してからのことで、生きておるうちはわからぬと一般にはされているが、じつは阿弥陀は真実証から本願をおこしたのである。阿弥陀は真実証からでてきたのである。真実証が法性法身である。真実証のところに「然れば弥陀如来は如従り来生して報応化種々の身を示現したまう」とでてくるゆえんがある。

一如の境涯、仏も衆生も平等の世界、一如とは真実、真実は真如、真如は一如、一如とはまこと。如とは常住、真実常住、一如には、悟れる仏でも迷える衆生でも同じである。「まこと」に仏も衆生もかわりはない。如来にあっても衆生にあってもかわらぬものを一如という。

如来と衆生はちがったものであろうというが、「まこと」は仏でも衆生でも同じことである。迷っておっても悟っておってもみな一如である。一如平等である。これは、我われは迷っておるとわからぬが、南無阿弥陀仏ということは仏も南無阿弥陀仏、我われも南無阿弥陀仏ということである。南無阿弥陀仏で一如は証明される。迷えるものも悟れるものも南無阿弥陀仏、諸仏も衆生も南無阿弥陀仏である。

南無阿弥陀仏をいただくと一如たるゆえんがわかる。ほかのことでは衆生と仏と一如ということはわからぬ。念仏なしでは一如は理屈でいうほかはない。事実にならぬ。念仏によって仏と我われとは一如である。仏にあっても南無阿弥陀仏、衆生にあっても南無阿弥陀仏。衆生には南無はあるが、仏には南無はあるまいというがそうではない。仏にあっても南無阿弥陀仏という行（ぎょう）、南無阿弥陀仏という証である。われらの信心も行としてあらわせば南無阿弥陀仏である。迷える人間は信。悟れる仏は証。信と証は位はちがうが、一つの如である。これを真如という。

われらの阿弥陀仏は、一如の南無阿弥陀仏から本願をおこし、そして修行した。南無阿弥陀仏から離れぬ。真実証の象徴が南無阿弥陀仏である。我われは浄土に生まれるまで南無阿弥陀仏を称（とな）えて浄土で助かるというのではない。南無というところに無上涅槃（ねはん）がある。無上涅槃の象徴はただ阿弥陀仏であろうというがそうではない。南無がなければならぬ。南無のあるとこ

ろに無上涅槃がある。聖道門では、仏にならぬうちは南無阿弥陀仏というが、仏になると南無は消えてしまうと考えているようであるが、浄土真宗は、悟る仏も迷う衆生も相互に南無阿弥陀仏と念ずる。これ仏々相念である。念とは南無することである。

どのように南無するか。たがいに南無阿弥陀仏と南無する。仏と仏と南無阿弥陀仏と南無する、これ諸仏同証の悟りである。平等一味の悟りから、阿弥陀仏が南無阿弥陀仏とあらわれてくだされたのは、如のうえに南無阿弥陀仏を感得なされたのであろう。いわゆる、従果向因して、久遠実成の位から人間にあらわれてくだされた。一如の象徴、南無阿弥陀仏を感得して念仏往生の願をおこされた。それをおこしてくだされたもとはどこにあるか。四十八願のうえでは第十一願である。第十一願はこのように重大なる願である。

真実証の願がいちばんさきにあって、そこから光明、寿命の二願がでてくる。だらだらと四十八願をならべているのではない。第十八願の欲生我国から、第十九、二十の二願がでてくる。これを三願転入という。新しい宗学はこの欲生我国ということを明らかにせねばならぬ。だいたい第十一願が法性法身、それから第十二、十三の方便法身が成就されたのである。まず一如の証りを第十一願で明らかにする。第十八願のみをみても法蔵菩薩の本願をおこした場所はわからぬ。もとは第十一願にあると親鸞は領解された。とくに下巻は第十一願成就文からはじまる。

最初から第十八願があるのではない。第十七願成就文があってその次に第十八願成就文がでてくる。まず、能讃所讃で申せば第十一願成就文を所讃の境として、所信能信と第十七願、第十八願成就文がでてくる。

安楽国をねがうひと
正定聚にこそ住すなれ
邪定不定聚くにになし
諸仏讃嘆したまえり

（『浄土和讃』）

と和讃にもあるとおり、第十七願成就が第十一願と第十八願の中間にあってこの第十八願がまた所讃にまわるのである。いちおうは第十七願成就を讃嘆なさるが、またその第十八願成就を第十一願成就のところで第十七願がまた讃嘆なさるということになるわけである。

だいたい、いまの知識階級は方便法身はわからぬというてむやみに法性法身を尊ぶのは、宿業ということがわからぬからである。宿業の自覚において方便法身の本願がある。宿業の自覚のない人に方便法身は領解できぬであろう。「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」（『歎異抄』後序）というような領解は、いまだかって世界のいかなる宗教家にもない言葉である。このような深い純真な信仰は、ほかに例のないことである。しかもそれは聖人のつねの述懐と伝えられている。